

---

# 未来?過去!?

棟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未来？過去！？

### 【Zコード】

Z4953A

### 【作者名】

棟

### 【あらすじ】

平凡な日々をおくつていた【月島ちはる】と友人でどこかおかしい【桜井春】そんなある日一人の男が倒れていったのを発見して関わついたら次の日【春】が行方不明になる。【ちはる】は昨日の男が怪しいと考えているが…。実はこの男現代の人間ではなかつた

## 第1話・謎？

4月26日・月曜日 朝

いつも通りの朝が始まった。別に学校は嫌いではない。友達だつていないわけではないし、勉強が苦手なわけでもない。ただなんの変化もなく過ぎていく日々が嫌いなのかもしれない。

と、高校へ登校する時考えていた。

いきなり後ろから声が聞こえた。

『おーい！－ちはるー！』

……なんて大きな声…。前を数人歩いていたが全員振り向いた。

『もう！恥ずかしいから大きい声で人の名前呼ばないでよ！』

私は必死に言つた。

『ごめんごめん。アハハ』

：絶対反省はしない。

こんな朝が毎日続いている。

だから嫌になるのかな？などとまた歩きながら考え込んでいた。隣では春が喋っていた。あ春は先ほどの大きな声で人の名前を呼んでいた子だ。桜井春という名前で、季節的には『春』をイメージさせる名前だが、私から見ると…『夏』しか思いつかない。暑いしうるさいというのが私の『夏』のイメージ…。

『あれ？人が倒れてる』

春がそう言つて前を見ると本当に人が倒れてた。

『こういう時どうするんだっけ！？あつ人工呼吸？』と春が言つ。

『いきなり！？』本当に驚いた。『とりあえず救急車！あつ意識があるか確かめてみよう』

『わかった！』春はそう言つて頬をおもいつきり叩いた。

バチーン！バチーン！バコッ！

……3回もおもいつきりぶつた。しかも最後はなぜかグーで頬というより目の横を殴つていた。

『いやあ～まいっただね～、僕になんの恨みがあるかわかんないけどね～いきなり殴られてもね～』

ここは学校近くの公園。先ほど倒れていた男性が腫れた右目を濡れたハンカチで押さえながら話してる。見た目は二十代前半って感じ。でも無精髭で寝惚け目そしてやる気なさそうな声！顔！

ボソツ（…なんか怪しい人）

『そこ！なんか言った？』

『いえ、別にハハハ…（地獄耳！）』ひきつった顔で喋っていることが自分でわかつた。

『では失礼しまーす』走つてその場を離れた。

『ちょいちょいちょい！キミタチ待ちなさい』後ろから追つてきた。

『うわっ！追い掛けてくる』

『うわっ！つてとことん失礼だね！』

どちらも全力で走つている。私達はなんとか学校まで入つた時には男の姿はなかつた。

『面白かったね！』やっぱり春はどこかずれたことを言つている。

『何言つてんの危ないよ～。あーいった人が犯罪をおかすんだから

！』

『アハハ気をつけるよ～』

『……。』

## 放課後

『今日は先に帰るからー』私は春にそう言つと教室を後にした。いつもは一緒に帰るけどたまに私は一人で帰ることがある。だから別に珍しいことではない。これもいつもと同じ光景である。

一人で帰るのは遠回りをして家に帰るからだ。ただ歩くのが好きだしこともと違う景色も見たいからという特に深い理由はない。（今

日は人通りの少ない道を歩いて帰る（ひる）そう思い、いつもと違う道を選んだ。

ひょっとしたら違う道を通ればなにか起こるかも知れないとかすかに期待しながら歩いている。でも実際今まで変わったことは起きてない。まあそれが現実なんだろうなと思つていたら前方に倒れてる人を見つけた。…………とても嫌な予感がした。なんか見たことがあるし…。とりあえず素通りをしようと思つたが、横を通つた時、ムクツと起き上がつた。

『ヒイツ！』

『ヒイツ！つてまた失礼な発言だね）。つてかなんでキミは僕のいる所に現れるんだい？』

ボソツ（逆だよ）

『えつ？なに？』

『べつ別に（つてか反応するなら聞てるんじゃないの？）』

『まあいいや。あれ？僕をボコボコにした子は？』キヨロキヨロしながら言つた。

『（ボコボコつて…）別に帰りは一緒にやないから、まだ学校だよ』

『ふ〜ん、学校ね…』少し考えてから『学校つてど〜？』

『えつ？学校？…………このまま真っ直ぐ行つて突き当たりを右に行つて左に曲がつて右に回つて真っ直ぐ進めば学校だよ』

つと適当なことを言つた。

『む、なかなか複雑だな〜。ありがとう少女』と言つて消えていつた。

（やっぱり危ないな。明日、春にまた忠告しようと考へて帰宅した。

## 第2話・事件発生！

4月27日・火曜日 朝

今日もいつもと同じ朝 ではなかつた。いつものうるさい声が聞こえない。学校についたけどついに春は来なかつた。遅刻？今までそんなことはなかつたけど…。まああの春だし別に心配はしないけど。

『実は桜井が昨日から行方不明だそうだ。そこで警察と協力して学校でも桜井を探すので今日は全員自宅で待機して下さい。また何か情報があれば学校にすぐ連絡して下さい。それと帰宅するさいくれぐれも気をつけて帰宅して下さい』

担任が言い終えると、クラスはざわついた。

帰宅中　今日はいつもと違つた、春がいない。

1日いなくなつたからってそんなに心配することはない。  
と自分に言い聞かせる。

しかし考える。

あつそういうえば昨日の…。

私はあの男を思い出した。

適当な道を教えたが偶然途中で出会つたかもしれない。そもそもあの男はなんで春の居場所を聞いたんだろう。殴られた仕返！？。でもいくら春でも知らない人にはついていかないだろう。無理矢理連れて行こうとしても学校から春の家まで住宅が並んでいるから春があの大聲を出せば周りの人気が付くだろう。

……知らない人にはついていかない……。

知らない人？春にとつてあの男は知らない人じやない。

でも普通あんな出来事があつたんだから警戒するし知らない人が完璧他人である。

しかし春は昔からそういうことがある。

一度話せばもう知らない人ではないと言つていて、何度か誘拐されようとすることがあった。今まで大きな事件になつていなかが、なにがあるたび私は注意するが反省したことはないと思う。今回も【知り合い】だから、ということでの男についていつたのか？まさか。いくら春でも、もう高校生だし。……でも。と考えていた自宅についていた。

『あ～あ疲れた……春無事かな…』

『心配なら探しにいくか？』

『探すってどこを？…………えつ？』

私の横にあの男が座つていた

『ええっ～～～！！！』

すごい驚いた。なんでこの男が私の部屋に？？どうやつて家に入つたんだ？家は両親共働きで普段この時間帯、家は鍵をかけて誰もないのにこの男は私の部屋に入つていた

『ゆ、誘拐犯！その上泥棒！？』

いやひょつとしたら私も証拠隠滅のため誘拐しに来たのかもしぬない。。。『誘拐？なんの』

言い終る前にカバンやその辺にあるものを投げつけた。

『イタツちょつ 待つてイタツ』

ゴツ。鈍い音がした。私が投げた四角い時計の角が頭に直撃した。

『あつ』

私は投げる手を止めた。やりすぎたかも…でも相手は犯罪者今がチヤンス家から出て警察に連絡しよう。部屋を出ようとした時

『あの少女の居場所知りたくないのか？』

男が言つた

『うつ…』

私は迷つた。警察に連絡すれば事件は解決すると思うが、私が家を出て連絡してゐる間にこの男が仲間に連絡して春を殺すかもしれない

…一考えすぎかもしれない。でもこの男の言つことを聞けば春に会えるかも…。

私は部屋を出るのを止めた。

『ふうーまた酷い目にあつたな』  
男はおでこを押さえながら言った。

『春はどこなの?』

『どこなんでしょうね~?』

人をおちょくるしゃべり方で返事をする。『なに言つてるのー私も誘拐するなら早く春の所に連れていくてよ』

『誘拐?さつきも言つてたけど、僕は誰も誘拐してないよ』男は軽く言った

『嘘!だつて昨日春の居場所聞いていたし!第一案に無断に入り込んで』

『彼女の場所を聞いたのはコレを返そうと思つてね~』

そう言つてハンカチを出した。昨日腫れた目を冷やすために春が出したハンカチだ。

『昨日キミが言つた通りにいつたら警察署についてね~まいつたよハツハツハ~』

『うつ、じゃあなんで家にあがつてんのよ!』私は問掛けた。

『いや~学校の場所もわからんないし、しょうがないから昨日寝てた場所から真っ直ぐキミの歩いていつた道をいつたらキミに似た女性がカギをポストに入れてどつかに出かけていつたからそれを使ってね~』

似た女性は母親だろ?……。

『それでキミにこのハンカチをあの子に渡してもらおうと黙つてつてか不法侵入じやん!』

『ちゃんと、お邪魔しますつて言つたよ』ちゅつとキレぎみに言つた。

ばつ馬鹿だコイツ…なんできつとキレてるの

『あつそれよりアンタは春の居場所知らないの?』

『知つてたらわざわざいんな所来ないよ～』 いちいちムカつく」とを言つ。

『でもわつか、あの子の居場所を知りたくないのか？って聞いたじやん』

『いや～ そうでも言わないとキミ逃げそしだったから……とりあえず近くにあつた枕を顔面に投げつけた。

### 第3話・道具！？

『とりあえずビニを探そう?』

私は家を出てから言った。

『うーんそうだねー、とりあえずあの子の家に行つてみよう。次はちゃんとした道を教えてね』

いちいちうるさいやつだ。

『はいはい』

私は愛想なく答えた。

春の家に向かう途中いろいろ考えた。なんでこの男は一緒に春を探すのだ?ハンカチを渡すだけなら私に預ければいいのに。でも誘拐犯にしてはなにか違う気がするし、こんなことをする意味がない。ますます怪しい。第一、家に不法侵入したのは犯罪だし……。

『ここが春の家よ』

春の家についたが警察の人が外に数人いるし中にも家族と警察がいるようだ。

『つてか春の家に来てもなんの意味ないじゃん』

『いやー部屋に入れればいろいろとやりやすかつたんだけどなー……また不法侵入をしようと考えていたのか……』

『これじゃあこの道具が使えないな』

男はいつの間にか、四角い箱みたいなのを持っていた。今まで見たことのない物だった。パツと見てSF映画でできそうな未来的な物に見えた。しかしよく見ると一部古い物でつなぎあわせてる所があつた。古臭い機械。所々、木の板も使ってある。天辺には矢印みたいのがついていた。

……なにこれ?まるで未来の道具と過去の道具が交ざったみたい。過去と未来?

『なによこれ?』

『えつ、えーと説明してもどうせ信じないから実際に使ってみるよ。

でもあの子の所持品なんて持つてないよね？』  
『なに言つてるの？やつぱり危ないかも。

『あつ！ハンカチ持つてたんだ！これを使おつ』

『（自問自答？…。）』

『でつ、それをどうするの？』

『この箱にハンカチを入れて』

『それで次にこのスイッチを押します』

なんかインチキ手品師の口調になつてきた…。

『あつ、このスイッチを入れると僕は氣絶するけど、この箱がある

子の場所を教えてくれるから僕も一緒に連れてつてね』

……やつぱりおかしい！なに言つてるのか全然わからない！氣絶する前に氣絶するつて宣告する人なんて見たことない！そもそもなんでこんな怪しい男と一緒に行動しないといけないんだ？逃げよう『やつぱり別々に探した方が

ポチッ

あつ押した。

バタツ

『えつ？』

押した瞬間、男が倒れた。…………なんの冗談なんだろう。

『はあ～』

私がため息をついて、ふと男の持つていた箱を見ると天辺の矢印が  
急に動きだし、北の方をさして止まつた。…………？よくわからない。  
なぜ急に動いてそして止まつたのか。私はその箱を手に取り、確認  
をして、倒れた男をチラツと見て再び箱を見た。しようがない、今  
はコレを信じるか。乗り気ではないがとりあえずその矢印の方向へ  
行くことにした。…………でつこの人どうしよう。本当に氣絶して  
んのかな？第一連れていくつたつてどうやつて？…………とりあえず家  
から自転車を持つてこよつ…。

## 第4話・発覚

昼

私は家から持つてきた自転車の後に男を落ちないように縛り付けて、矢印が指す方へ向かつた。其にしてもいつたいこの道具はなんなんだろう？ 左右の分かれ道があるとどちらかに矢印が傾く。本当に導かれているようだ。うーん謎だらけ。

『うーん』

あつ後の男が起きたみたい。

『ねえ結局あなたは何者なの？ それにこの道具どうみても今の時代の物じやない気がするんだけど』

『ちょっと興味をもちはじめたね～ そろそろ信頼してくれたかな？』

『ボソッ（別に今の所信頼する要素はないけど……）興味はあるわ』

『まだ信頼されないか～』

… やつぱり地獄耳。

『まあどうでもいいけど、僕の事は話とくね。名前は伊久垣いくがきけんた犬太

つて名前。伊久垣でいいよ～。あつキミの名前は？』

そういえば名前を聞いてなかつた事に気付く。

『… 私は月島ちは… わかった！ 月島ちはだね。うーんじゃあ、ち

はと呼ぼう

名前を言い終る前に勝手に理解して呼び名も勝手に決めた。今までトロトロしてたくせになんで今だけ早くなつたのだ？

『名前違 』それで話を戻すけど

また遮られた。本当にムカつく！ わざと？

『実は僕現代の人間じゃないんだ～。』

なんか重大な事を言つてる気がするが、やる気のない口調で言われて重大な気がしなかつた。でもこれが本当なら凄い事だ。私はこういつのを期待して日々過していたのだ。だから気持の準備は出来ていた。なのであまり驚かない。

『つてことはあなたは未来からきたの?』

すごい! もうドラ もんの世界じゃない!

『いや過去から来たんだ』

えつ? 過去? …。なんで過去なの?

『なに言つてるの! なんで未来からじゃなくて過去からなの? ? そもそもこんな道具過去には無いでしょ』

『いや~ 分かりづらいよね~ 僕もよくわからないんだ』

驚かないとつっていたがなんか違う意味で驚いた…。

『とりあえず最初から話すね』

伊久垣が話だした。

『今2006年だよね? 話は600年後から始まるんだ。2606年。その頃過去と未来にいける薬が開発されたんだ。この薬は年号が書いてあってその年号の薬を飲むとその年にいけるんだ』

『すごい未来にはそんなのがあるんだ』

『でも、この薬は一つ問題があつて、一度飲むともう一回以降効果がないんだ』

『えつじやあ一度タイムスリップしたらもう元の時代には戻れないつてこと?』

『そなんんだ、試しに一日戻つて使ってみたら効果がなかつたみたい』

『あんまり便利じゃないんだ』

『そう、それで発表する前に使用禁止として倉庫に保管したらしいんだ。』

『それで?』

『保管していた薬の一部が流失したらしいんだ。それでその流失した薬の年号は2005年だつたんだ。今でいうと去年だね』

『へえ

『それで流失した薬が裏で回つてある犯罪組織の手に入つたんだ。その犯罪組織はほとんどが指名手配犯でもう逃げ場がなかつたんだ。それで捕まるより過去に行つた方がいいと判断し、2005年に戻つたんだ。』

『…………。』

『過去に行つた犯人がいろいろ悪事を働いたら、未来が変わっちゃうわけなんだ。そこで、その薬を開発した一人の

「東博士」

が責任をとるということで2005年の薬を飲んだんだ でも』

『でも?』

『どこで間違つたのか、博士が飲んだんだのは明治後期の1906年。』

『えつ…………。』

『唯一不幸中の幸いで薬は飲んでから数時間たたないと効かないんだ。だから2005年の薬を持って、泣く泣く1906年に来たんだ』

『…………最低な話ね……。』

やつぱりどの時代にも馬鹿はいるものだ。『あつちなみに1906年は僕がいた年ね。それでこつからが僕の話なんだ』

『いきなり変な人が現れたんだ、とてもびっくりした反面とても嬉しかつたんだ』

『なんで?』

『実は僕平凡な日々をおくついて退屈していたんだ、同じようにダラダラと過ごす日々が嫌いでね。なにか変わつたことは起きないかといつも思つていたんだ。』

『やばい! こんな男と同じようなこと考えていたなんて……所詮私もこの程度? 私は軽く落ち込んだ。』

『それで博士から今までの話を聞いて変わりに僕がその犯罪者達を捕まえに行くことにしたんだ』

『ふうん、其にしてもアンタ現代に來ても普通に生活してゐるんだ。』

驚いたりしないの？』

『それはね、博士が使っていたコレをもらつて勉強したからね』  
そういうて、本を出したみたいだが、私は自転車を運転しているわ  
けで見れるはずがなかつた。

『「過去を知る！20世紀後半～21世紀前半book」  
つて本でその時代のことを勉強出くるんだ。たぶん犯人達もコレを  
見て勉強してたと思うよ。』

やつぱり未来はわからない…。

『まあ勉強しても初めは戸惑つたね。最近やつと慣れてきたんだ。  
まあ犯人達も同じ状況だと思うよ。だから最近になって活動を始め  
たんだ。』

『へえー。つで、春はその【未来の犯罪者】に関わってるかもしれ  
ないわけ？』『うーん、はつきりとはわからないんだけど、最近こ  
の近くで女子高生ばかり行方不明になる事件が多発してるよね。』  
『それって、何度か追い詰めたけど空を飛んでいつたとか、3人の  
警官を一瞬で殺害したとか…都市伝説的な話は聞いたことがあるわ。  
となり町でも起きてたような…。まさかこれもその犯罪者が…？』  
『そらなんだ、それで僕も最近【未来の犯罪者】の写真を確認して  
たらそつくりな奴をこの町で見つけてね。』  
『……………！』

## 第5話・戦い！？

夕方 前

結構時間が経過したと思う。矢印の反応が強くなってきたことが何と無くわかった。近付いて来てるのかもしれない。

『もし【未来の犯罪者】がいたらどうするの？』

『うーん戦わないといけないかな～説得して応じるわけないし～』

『戦うつてアンタ戦えるの？』

『えつ 戦うのは、ちはだよ！？』

『……えつ～～～！？なんで私が戦うのよ！？しかもなに当たり前見たいに言つてんの？』『あれ？当然な 『ことじやないわよ！～』途中で遮つた。

『言つてなかつたつけ？この未来の道具は作動する瞬間とでも強い電波が生じて使用者は気を失うんだ～。って言つてもそれは過去の人間だけらしいけど』

『？』

『なんか未来の人はその電波に耐えるような体が出来上がつてゐんだ。つまり過去の人間は軟弱つてことだよ～』

『えつ！？それって私も過去の人間だよね～？』

『あつそつか～』

『…………。どつちも戦えないじゃん！』

『うつ、痛いとこつくね～』

…………「んな馬鹿な人つているんだ…。」

『あつ』

いつのまにか町外れの倉庫前についていた。矢印はこの倉庫を指しているみたいだった。

『たぶんここだね～。』

倉庫を前に一気に緊張して來た。もしここに犯人がいたら……。い

やつ！春を助けるんだ！

『とりあえず武器？を渡しとくよ』

『武器？』

『うん。野生動物を捕獲するネットだけじね』  
そう言つて野球ボールみたいなを取り出した。

『とりあえず5個あるからちが3個で僕2個ね』

『えつ…。これだけ？しかも野生動物を捕獲するネットって……。』  
もはや武器じやない気がするんだけど…。』

『大丈夫！これも未来の道具でね、ボールに小さなボタンがついて  
いるだろ、これをね押して作動させてから投げると、何かに触れた  
時ネットが出てきてその対象物を捕獲するんだ。それとこれは作  
動してから数秒は気絶せずに耐えられるから安心して！』

『（どこに安心をすればいいの？）』

『後一応コレもあるから』

今度は長い棒を出した。

『これは～簡単に言つと、電流棒。これで殴れば一発で気絶するよ。  
でもこれも作動した瞬間気絶するんだけどね！。』

もう全く意味がない。そこら辺にある棒と何が違うのだ。しかも自  
信満々に言われても…。

『…気絶したらどれくらいで意識が戻るの？』『うーん、捕獲用ネ  
ットは5分くらいかな？』

『えつ…5分も』

交互に道具を使っても5分は一人で戦わないといけない時があるな  
んて…。

『よし！中に入ろう』

私達は倉庫の重い扉を開けた。

そこは真っ暗で最初は何も見えなかつたが、次第に目がなれ見える  
よつになつた。とても広い倉庫で、周りはシートを被つている物ば  
かりだつた。

『あつ伊久垣、矢印がアツチの扉を指してゐるよ』

矢印が一番奥の扉を指していた。

『うん、あそこで間違いないね』

よかつた誰もいない。早く春の所に行つて早くここを出よつ

『オイツ！』

私達が入つてきた方から声が聞こえた。

『お前ら何をしている！』

男の声だつた振り返ると一人の男性が立つていた。さつき伊久垣に写真を見せてもらつていた。犯人だ。

『ここは俺の倉庫だ用がないなら出てもらおう』

『ボソツ（ねえ、今は一回逃げた方がいいんじゃない？入口が塞がれてるし、あつちは気付いてないからもう一回様子を見てから）』私は犯人に聞こえないよう、伊久垣に問掛けた。あれつ？

聞こえてない？つてか聞いてない！それどころか伊久垣は、

『お前が未来から来た犯罪者だな！お前を捕まえに来た！』

えへへへ！なんでこんなときだけ勇ましいの！？つてかやつぱり馬鹿なの？

『ほう、お前ら一体何者だ？未来を知つてることはお前らも未来から来たのか？警察か？それとも馬鹿な研究者達か？』

『いやつ俺は過去から來たんだ！』

別に言わなくてもいいのに…。

『ハア～？「オイツは相当な馬鹿だな！ハッハッハー』

ほら、やつぱり笑われた…。

『まあいい、お前らは死んでもうぜ！本来なら銃がで殺す所だが、ちょうど弾切れでな、これで殺してやるよ！』

男は日本刀らしき物を出し、更に空中に浮いた。

『ねえ、あの人浮いてるんですけど！それにあの日本刀は…？』

『あああれは未来の道具で、あいつの履いてる靴が空を飛べるようにするらしいよ。武器は日本刀みたいだけど、あれは伸縮自在で、更に鞭みたいになるんだって！危ないから氣をつけてね』

『氣をつけてねつて…。こつちは玉5個に只の棒1本…。……とり

あえず私が最初にボール投げるから気絶してる間絶対守つてよ！』  
そして私はボールのボタンを押し作動させた。…押しした瞬間、電気が全身に流れたみたいだ。頭がボーッとしてきた、これが気絶前なんだろうか。とりあえず素早くボールを男に向かつて投げた。がつ見事に避けられ男の後のパイプに当たりネットが開いた。駄目だ気を失いそう…。

…あれ？全然氣を失わない。

『あの全然氣絶しないんだけど…』

『本當だ、なんでだろ？あつそつか2006年の人間より1906年の人間の方がひ弱なんだ…うわっ危ない』

話ながら相手の攻撃を避けた伊久垣。

つてかひょっとして伊久垣が極端に軟弱なだけではないのだろうか？よくよく見ると、とても細い。そういうえばさつき自転車の後にのせていたが、考えてみたらあまり重たくなかつた気がする。現に疲れてないし…。やっぱり…。哀れみの目で伊久垣を見た。

『ちは！危ないよ

『わっ！』

私の前スレスレを刀がかすめた。

『油断してると危ないよ！じゃあ今度は僕が投げるからよろしく』

『えつアンタは使わないで』

遅かった。伊久垣はボタンを押してボールを投げた。しかし軽々と避けられ伊久垣は数秒後気絶した。

なんて迷惑な。

『なんだコイツ！道具の電波にやられたのか？とんだ馬鹿だな！』

男はそう言い笑った。

敵に一度も笑われた伊久垣…。やっぱり馬鹿なんだ。…つとそれど

ころじやない伊久垣を運ばなければ狙われてしまう。私は伊久垣を抱えたがとても軽かつた。女の私でも抱ながら走れるほど。

『とりあえず5分逃げなきや！』

私はひたすら逃げ回った。とても迷惑な男を抱えて…。

『う~ん』

『あつ起きた？とりあえずアンタさボール使わいで私に渡してよ』

『そりゃ』

伊久垣は私の話を聞いてないかのようにまたボールを投げた。そしてまた外れ気絶した。…………うわああ、何この男！馬鹿とかのレベルじゃない！

ヤバイどうしようもないアホだ！とりあえずもう邪魔なので電流棒だけを取り、伊久垣は隅っこに投げ捨てた。犯人も伊久垣を無視して私の所に迫ってきた。もう私がやるしかない。

カキン

しかし私の棒は簡単に弾かれた。 もう終りだ。私は目を瞑った。

『うわっ！』

私が目を開けると男はネットに絡まっていた。

『！？』

男の後に伊久垣が立っていた。

『アンタ氣絶してたんじゃないの？』

『いや~ボールは投げたけどボタンを押してなくてね~作動してなかつたんだ~。』

『えつじやあ氣絶したふりしてたの？』

『まあね。コイツが油断するのを待ってたんだ』

『…じやあ私はおどり？』

『そだね』

私は落ちていた棒を拾い伊久垣の顔面に投げつけた。

## ヒローゲ

1週間後

春は外傷等はなかつたが念のため一週間病院で療養していたのだ。

『あ～あようやく退院できた～』

『まったく！皆がどんなに心配したと思つてゐるの！』

春を含め行方不明だつた女子高生さ全員無事に保護された。未来的道具は見つかるとややこしいので伊久垣が全て回収した。捕まつた犯人は『俺は未来から來た』等を言つてまともに事情聴取が出来ないようだ。

『いやあ～帰る時一人で帰つていたら、たしか男の人とすれちがつたまでは覚えてるけど、気づいたらあの倉庫に閉じ込められてたんだよね』

たぶん誘拐するときに、未来の道具を使つたのだろう。

『それにも、ちはる凄いよね～！一人で犯人捕まえるなんて』

『たまたまね～』

『凄いな～たまたまやつつけるなんて！』

伊久垣は警察がくる前に姿を消した。また不可思議な事件が多発している。たぶん【未來の犯罪者】がまだ何人かいるみたいだ。それを捕まえるために行つた。（一人で捕まえることができるの？）。ちなみに最後まで私のことを【ちは】と呼んでいた。本当に適当な奴。そういうえばあいつの時代の話を聞いとけばよかつたかも。興味が無いと言つたら嘘になる。

いつもどおり春がとなりで喋つてゐる。いつも何かを求めていた私が平凡な日々をおくるとやっぱりこれが一番なのかもしれないと思つのである。

春が数歩先にでる

『あつ～人が倒れてるー～』

『...えつゝ！？』

「終わり」

## HPLローグ（後書き）

えつと初めて小説というものに挑戦してみました。無茶苦茶だった  
ので酷い作品になつたと思います 見てくれた方本当にありがとうございます  
ございましたm(—\_—)m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4953a/>

---

未来?過去!?

2010年10月10日04時33分発行